

湘南海岸の沿岸域利用の現状と 開発にかかる2, 3の問題点

建設省土木研究所海岸研究室 室長	正会員	宇多高明
研究員	正会員	村井禎美
フジタ工業㈱ (元海岸研究室部外研究員)	正会員	武中信之

1. はじめに

沿岸域の開発を行う場合、最適な開発計画を策定するには、対象地域の地理的、海岸工学的特性を把握することが必要である。筆者らは現在までに、いくつかの海岸について資料整理を行い、その地域の持つ問題点を明らかにし、開発計画立案上の留意点を指摘した^{1)~4)}。しかしながら、単にデータを整理し、解析するだけでは、実際に現地海岸がどのような利用状態になっているかを十分理解することは難しい。また、開発計画を策定するに当たっては、様々な角度から見た問題点を検討することが必要であるが、実際には現地でなければ分からないような問題も多い。筆者らは首都圏に近く、最も活発な利用が図られている湘南海岸において冬期、夏期2回現地調査を行った。その結果、前報において記述した点についても、実際の現地の状況と相違する箇所がいくつか見られ、改めて現地調査の重要性を認識するに至った。ここでは、調査により得られた知見のうち、利用が集中する夏期の調査を中心として沿岸域利用の現状を述べると共に、現地調査によって明らかとなった問題点について検討した。

2. 調査時の条件

調査は1988年8月3日(水)、4日(木)の2日間に行った。そのうち、3日は朝からあいにくの雨であったが、4日は晴れ間が広がり、海水浴日和となった。東京管区気象台の発表によれば東京地区の平均気温は、3日が24.8℃、4日が27.9℃である。今季は梅雨明けが遅れ、7月は雨つづきであったため、8月になって漸く夏らしくなった。第1日目の3日は西湘地区(二宮~大磯)、2日目の4日は湘南地域(相模川~逗子)を中心に調査を行った。

3. 調査結果および考察

ここでは、現地調査の結果に基づき、各着目点について考察を加える。本文中で用いた写真の撮影地点をそれぞれ図-1の地図上に示す。

3.1 施設設備の状況

交通の利便さは、地域の利用度にも表われ、特に利用者の過度の集中により、大量の輸送力が必要となる海水浴などについては、大きな影響を及ぼすと考えられる。湘南海岸は東海道線や江ノ電などの鉄道による大量輸送の手段が確保されており、夏期には多くの利用が図られている。一方、もう一つの交通手段であり、レクリエーションを対象とした場合に重要な位置を占める自動車については、周辺道路の整備状態や利用状態により、利便性が阻害される。湘南海岸でも平塚~藤沢間の海岸線を走る主要道は国道134号のみであるため、朝、夕の道路

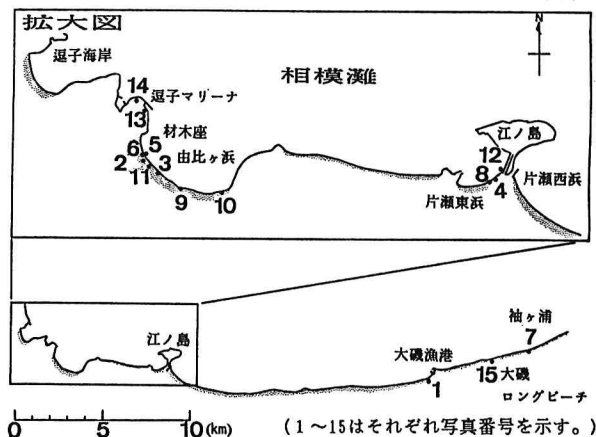


図-1 写真撮影地点



写真-1 国道134号の混雑状況

渋滞は慢性化している。冬期調査においても渋滞が見られたが、夏期にはこれに海水浴客などが加わるため、渋滞は始終やむことがない（写真-1）。自動車による利用で問題となるのは、道路の状態ばかりでなく、目的地の駐車場の収容台数も重要なポイントとなる。湘南海岸の夏期の混雑を考えると、駐車場の絶対的な不足が予想されたが、海岸線に近い駐車場はほぼ満車状態にあるものの、裏通りに民間の駐車場が点在しており、考えていた以上の収容台数があることが分かった。どの地域においても、海水浴場などのレクリエーション施設がある場所では駐車場を備えている場合が多い（写真-2）。その数は充分であるとは言えないが、必要量に対して絶対的に不足しているようにも見えなかった。ただし、場所によっては駐車料金が安い所も見られ、利用者から不満の声も聞かれた。駐車場などの施設に対する調査を行う場合に、収容台数のみで実際の利用状態を一概に判断することは出来ない。施設の状態が十分なものとなっているかを知るには、経営形態（民間 or 公共）、料金などについて詳細に調べることが必要である。また、整備計画を立案するにあたっては、これらの条件を加味して実態に沿った計画を立てることが重要な点となる。

海岸における便利施設では、仮設構造物として建てられている海の家が代表的である。海を家の設備は、更衣室、シャワー、便所、売店、食堂などの簡単なものである。しかしながら、これまでの海水浴場の利用方法を考えると、このような簡単な設備だけの施設でも、利用者の最低限のニーズには充分応えてきたと言える。ところが、最近では海を家の姿も従来の浜茶屋的なものから脱皮し、様々に変化しつつある（写真-3）。変わったのは外観ばかりではなく経営形態自体にも変化が見られ、企業の資本参加によりイベント（例えば、ミス・コンテストやビーチバレー大会 etc.）を開催するなどの試みも行われている。非常に多くの利用者を持つ湘南ならではの光景ではあるが、このような経営側の変化は、利用者意識の変遷を反映していると言える。最近では、少しでも質の高いサービスを求める傾向が強くなってきており、特に観光地ではその傾向が顕著である。今後もここに見られるような変化は、一層進んでいくものと思われる。

片瀬東浜では県により階段護岸の整備が行われており、今回の調査時には一応の完成を見ていた。階段護岸の前面及び護岸上には海の家が建ち並んでいる（写真-4）。中には護岸の形状をうまく利用したものも見られ、非常に興味深い。最近では、環境整備や保全事業として海岸域の整備を行う際、周辺の景観をも考慮する場合が見られるようになってきた。しかしながら、ここに見られるように、仮設構造物によって場所が占拠されてしまうと、計画された景観自体が変わってしまう可能性がある。景観を計画されたとおりに保つには規制等を設けて、仮設構造物の設置を制限するなどの方法も考えられるが、海を家の存在を軽視することには問題がある。地元利益に関連することもあるが、海の家がなくなった場合に利用者のニーズに応じたサービスの供給が出来るかどうか疑問が残るからである。日本の海岸が海水浴を中心とした利用のされ方をしている以上、その利用時期は限られており、利用者数も季節的変動が大きい。ピーク時の需要を満足させる施設の整備は、他期間の利用度を考えれば現実味に乏しく、需要と供給のバランスを保つには仮設の施設に頼らざるを得ない。施設に関しては、恒久的施設にばかり目を向けるのではなく、仮設施設への対応にも配慮する必要があると思われる。例えば、仮設施設の設置を前提とした配置計画、構造物設計を行う、あるいは景観にマッチする仮設施設となるように便宜を図るなどの対処も考えられよう。

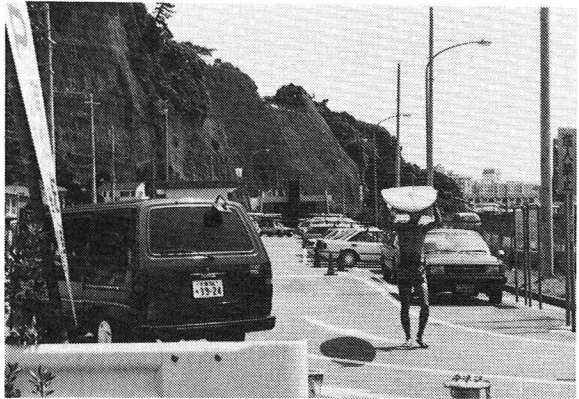


写真-2 海岸道路沿いの駐車場



写真-3 新しいタイプの海の家

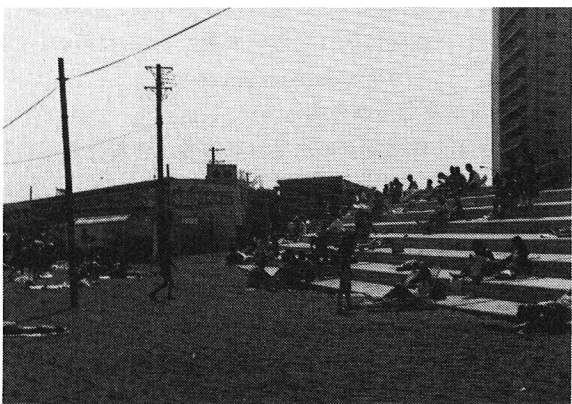


写真-4 階段護岸と海の家

3.2 海岸の利用状況

海洋性レクは夏期に活発化する。海水浴についてはもちろんのこと、一般に通年利用とされている海洋性レクについても同様である。例えば、マリーナの利用状態は明らかに冬期と夏期では異なるし、特にディンギーなどの小型艇やウインドサーフィンなど水に接する割合が大きい海洋性レクには、はっきりとした違いが現われる。従来の調査、研究によれば、湘南海岸は冬期においても、通年の海洋性レクについての適性条件を備えている¹⁾。つまり、条件についてのみ見れば、冬期でも利用状況は変わらないはずであるが、実際には季節的に異なった状況が見られる。ここで、適性条件とは最低限必要な条件であって、最適条件を示すものではないことに注意したい。すなわち、ただ単に利用可能な条件を作り出すだけでは、通年利用を見込んだ計画であるとは言えないのである。各条件を年間を通じて利用者が望む状態になるべく近づけて行くことと、季節によって生じる欠点を補うような利用形態を盛り込んだ計画を策定することが必要である。

夏期に活発となる海洋性レクのうち、とりわけ利用度の高いレクリエーションが海水浴である。湘南海岸でも藤沢地区を中心として、非常に多くの利用者が見られる。日本において代表的な海洋性レクとなっている海水浴であるが、その定義にはあいまいな部分がある。元来、海水浴の概念が西欧から導入された明治10年代には、湯治としての考え方が主流であった。現在のレクリエーションとしての海水浴が一般的となったのは、昭和に入ってからである。海水浴の考え方は年代と共に変遷して来たとも言える。最近の人々が考える海水浴とは一体どのようなものであろうか。単に泳ぐことだけを目的とするならば、プールの普及が進んだ現在では、わざわざ海まで出かける必要はないであろう。実際に観察していると、海の中にいる人よりも浜辺で寝ている人の方が多く、たとえ海に入っても泳いでいる人は稀である(写真-5, 6)。行動は様々で、日光浴をする人、波打ち際で遊ぶ人、キャッチボールする人、散歩する人など、それぞれに楽しんでいる。海水浴とは、これらを全て含めたものを指し、決まった形を持つレクリエーションではないようである。言いかえれば、人々は海岸域の持つ開放性〔①社会的障害(社会から課せられた義務)からの開放, ②視覚的障害(都市空間の持つ閉鎖性)からの開放, ③心理的障害(日常生活に伴う緊張)からの開放 etc.〕を求めてやって来ているのであり、それぞれが自分の方法によって欲求を満足させる行為が海水浴であると言えよう。

これまでに行われてきた資料調査などから^{1), 4)}、湘南海岸の利用状況は、湘南地域(逗子～大磯)と西湘地域(大磯～小田原)の2つに大別されることがわかっている。今回の調査では、夏期のレクリエーション利用状況を、湘南、西湘両地域で比較する予定であったが、天候の条件が大きく異なったため、正確な意味での比較を



写真-5 海水浴場水域の状況



写真-6 海水浴場陸域の状況



写真-7 袖ヶ浦海水浴場(湘南地域)



写真-8 片瀬東浜海水浴場(湘南地域)

行うことは出来なかった。しかしながら、両地域の持つ特徴は、天候にかかわらず現われており、ここではその特徴の差異について述べる。2地域の代表的な海水浴場の様子を写真-7,8に示す。写真-7でもわかるように、西湘地域の袖ヶ浦海水浴場は砂浜幅も狭く、延長も短い。また、この地域では西湘バイパスが海岸線を走っており、袖ヶ浦海水浴場はその高架下にある。このため、砂浜にいる人は上空と周囲をピアなどの構造物によって囲まれ、視界がさえぎられる状態となっている。監視員の話によれば、利用者は地元中心であるとのことであった。背後には町営のプールやバンガローも整備されているが、最も重要な海岸の魅力（オープンスペース性）が欠けているため、外部からの利用者が少なく、湘南地域に比較して利用度が低くなっているものと推測される。写真-8は湘南地域の片瀬東浜の利用状況である。浜幅も広く、周辺には視界を遮るような人工の構造物がないため、オープンスペース性は十分に確保されている。海の家なども多く、砂浜は多くの人で賑わを見せている。また、ウインドサーフィンやジェットスキーなど海水浴以外の海洋性レクによる利用も図られていた。オープンスペース性などの点から見た両者の違いは大きく、利用度にも顕著な差となって現われていると言える。

海岸の利用状況は、その海岸の持つ自然および社会的条件によって、各海岸毎に差異が現われる。ところが、これらの条件がほぼ同一であると考えられる同じ海岸内であっても、利用状況は場所によって異なることがある。写真-9,10は同じ由比ヶ浜の砂浜の状態であるが、利用状況にかなりの差が見られる。写真-9は由比ヶ浜と材木座海岸の境界付近から七里ヶ浜方面に向かって撮った写真であるが、砂浜でのんびりと日光浴を楽しむ人も多く見られる。それに対し、由比ヶ浜西端付近を示す写真-10では、砂浜に落ち着いている人は殆どなく、砂浜にいる人の大部分は散策などの通行人である。この2ヶ所の写真から、すぐに違いが分かるのは海の家が存在と砂の粒径の違い、および浜の汚れ具合である。この3つの違いにより利用度が大きく異なる理由については、次のことが考えられる。まず、海水浴において果たす役割を考えれば、海を家の存在の有無は利用度を左右する大きな要因となる。また、一般に海水浴場の砂の粒径は2mmが良いとされているが⁵⁾、粒径が細かくなりすぎると泥に近い状態となり、肌ざわりも悪く見た目にも良くない。浜の汚れについても視覚的な嫌悪感に訴えるところが大きく、特に浜にゴミなどが散乱している場合などはなおさらである。これらは判断基準があいまいなものではあるが、利用者の心理に与える影響は大きい。すなわち、基本的な条件が同じであれば、利用者は利便性、外観や感触の良さなどに満足感を覚える傾向があり、たとえ混雑していてもこれらを満たす場所に集中が起きるのである。このように、わずかな条件の違いにより利用度に大きな差が現われることにも注意すべきであろう。

最近ではサーフィンやウインドサーフィンが盛んに行われるようになり、海水浴客への危険性や漁業者への配



写真-9 利用度の高い中央部付近

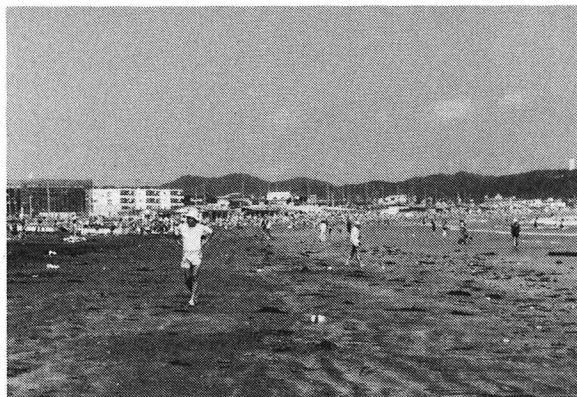


写真-10 利用度の低い西端部付近



写真-11 ゾーン分けを示す看板



写真-12 サーファーフェンス

慮から、利用地域をゾーン分けしている所も見られた（写真-11）。また片瀬東浜、片瀬西浜では、ただゾーン分けをするだけでなく、物理的に出入りが出来ないようにサーファーフェンスと呼ばれる柵を設けていた（写真-12）。利用方法などの問題に対しては、湘南海岸は全国的に見ても様々な試みが図られている海岸である。ゾーン分けなどの方法は、現在のところ、問題となっていた点についてうまく機能しているようであるが、新たに生じる問題が含まれていないわけではない。たとえば囲い込みが進めば海岸利用の自由度が次第に失われ、利用者の不満をもたらす可能性がある。特に、サーファーフェンスに見られるような物理的障害は、各海洋性レク間の疎外感を深めるとともに、海岸線が分断されることによってオープンスペース性までが喪失してしまうことも考えられる。このように、ここに見られるような解決策には利点と欠点があり、現段階では果して最適であるか否かの判断は難しい。しかしながら、様々な方法が試みられることによって問題が明らかになれば、現在まであまり考えられてこなかった利用方法などに対する問題解決への糸口になると思われる。

3.3 既存の開発地の特徴

リゾートとしての適性条件を知るためには、既存のリゾート施設を調査し、成功原因などを掘り下げて考えることも有効な手段である。今回は海洋リゾートとして比較的成功している逗子マリナ、大磯ロングビーチを調査した。ともに民間資本によるレジャー施設である。逗子マリナは、マリナを中心とするリゾートで、マンション、プール、テニスコート、ボーリング場などの施設を併せ持っている（写真-13,14）。プールなどの付帯施設の運営は、マリナとは別の経営体系となっており、一般客でも利用することが出来る。核となるマリナは単独で運営されているのではなく、周囲にあるリゾートマンションのオーナーに対してだけ利用権が与えられており、マンションの付加価値を高める役割を担っている。この点から、逗子マリナ全体はレジャー施設としてではなく、不動産的価値としての意味合いが強いと推察される。これは欧米によく見られるプライベートビ

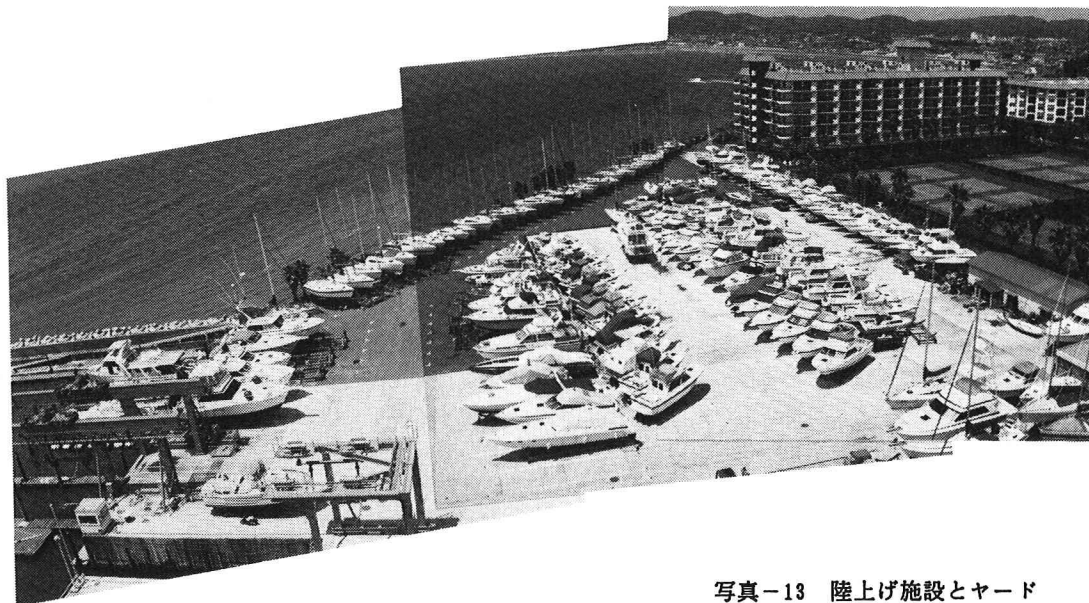


写真-13 陸上げ施設とヤード



写真-14 マリナ内の付帯設備(プール, テニスコート, ボウリング場, リゾートマンション)

ーチなどの意識に通じるものがあり、一種のステータスシンボルとして考えられているとも言えよう。

次に、大磯ロングビーチであるが、ここはいくつかのプール、ホテル、テニスコート、ゴルフ場を持っている（写真-15）。夏期には当然のことながらプールを中心とする利用が図られており、外部からの入場者も多い。ホテルはプールと直結しており、宿泊客はプールを自由に利用出来るようになっている。温水プールもあるので冬期にも利用は可能であるが、利用者は少なくなると思われ、夏期以外ではゴルフ場利用者などによる宿泊客が多いと推測される。この施設のある大磯の海岸は波が高く、遊泳禁止になっているなど海洋性レクによる利用を前提とした場合の条件はあまり良くない。ここでは無理な開発によって、海洋性レクを中心とした海岸の直接的な利用を図るのではなく、海岸の持つ開放性や情緒性をプールやゴルフ場などに取り入れ、間接的に海岸の特性を利用することによって、需要を生み出す効果を狙っていると考えられる。

どちらの場合も、積極的に海岸を利用することを主目的に造られた施設ではない。海岸の持つ利点や環境、雰囲気などを巧みに利用することによって、周辺施設の価値や需要を生み出している。このように、沿岸域の利用計画では必ずしも海岸自体の条件によって計画の成否が決まるとは限らず、沿岸域の特性をいかに利用していくかが重要である。海洋性レクを中心とした海洋リゾートを考えた場合、気候条件や海象条件が適地としての障害となる⁵⁾。ところが、全国各地で盛んに進められている沿岸域の開発の計画には、海水浴場やマリーナを中心とする画一的なものが多く、実現には困難さを伴うと考えられる計画も見られる。海洋リゾートの計画を立案するには、海水浴などの単一目的に固執することなく、様々な利用形態について検討してみることも大切である。



写真-15 大磯ロングビーチの施設

3.4 まとめ

現地調査により明らかとなった湘南海岸の沿岸域利用の現状と、計画策定に必要な視点および注意事項について述べる。

- ①交通面で重要な意味を持つ施設である駐車場数は、予想していたような絶対的不足は生じておらず、ある程度の収容台数を持っていることが分かった。しかしながら、場所によっては使用料金が高いなどの問題も残されている。経営形態や料金などを調査し、利用者の不満を解消するような施設の整備計画の立案が望まれる。
- ②海岸における代表的な施設である海の家は、経営、利用の形態に変化が見られ、多様化が進んでいる。日本の海岸利用の季節的特性を考えれば、海の家的重要性は高く、軽視することは出来ない。海の家などの仮設構造物の積極的な利用も含めた開発計画や対応策が図られることが望ましい。
- ③海洋性レクの適性条件とは、最適条件を指すわけではなく、海洋性レクに最低限必要な条件である。利用可能な条件を満足させるだけでは活発な利用を期待することは出来ず、利用者数の季節的変動をなくすことは出来ない。利用者が望む条件を目標とし、季節的変動特性を小さくするように計画を立案することが必要である。
- ④社会的、海岸工学的条件が異なる場所で、同一の利用形態を想定した施設を設置しても、期待する利用状況は必ずしも得られない。地域の持つ特性を生かした開発計画が必要である。また、基本的な条件が同一であれば、利用者の満足感を満たすわずかな要素の違いにより利用度に差異が現われることに注意することが必要である。
- ⑤沿岸域の開発は必ずしも直接的、積極的な海岸利用を図る必要はなく、環境条件や雰囲気などの特性を間接的に利用することによって、十分有用な計画を立てることも出来る。海水浴を中心とするような画一的な計画に固執することなく、様々な利用形態について検討し、計画を策定することが必要である。

参考文献

- 1) 宇多高明・村井禎美・武中信之(1988)：湘南海岸の地理的、海岸工学的諸条件に関する検討、海洋開発論文集、Vol. 4, pp. 237～242.
- 2) 宇多高明・村井禎美・武中信之(1988)：地理的、海岸工学的諸条件から見た九十九里海岸の評価、海洋開発論文集、Vol. 4, pp. 231～236.
- 3) 宇多高明・村井禎美・松永博史・羽成英臣(1988)：鹿島灘沿岸の地理的、海岸工学的諸条件に関する検討、海洋開発論文集、Vol. 4, pp. 225～230.
- 4) 建設省土木研究所海岸研究室(1988)：海域制御構造物に関する共同研究報告書(4), (7), 土木研究所資料、第2577号、第2661号.
- 5) 建設省九州地方建設局(1984)：海の中道海浜公園の海浜緑地の整備管理の適性化に関する調査報告書.